

---

# Drop Out !

ビターチョコレイト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Drop Out!

### 【Nコード】

N1332W

### 【作者名】

ビターチョコレゐト

### 【あらすじ】

『俺達は所謂、ドロップアウト組 落ちこぼれ組だよ』

ここは学園都市。正式名称は『政府管轄第零学園都市 通称：零』。噛み砕いた『Drop』の力によって能力を発動する適合者達が日本全国、否、世界中からも集められたこの場所。集められた生徒達の中でも所謂落ちこぼれ 『ドロップアウト組』というのがいた。《計画》において『劣等』の烙印を押された少年少女達。ちよっとおかしな、でも普通の彼らが紡ぎだす日常と非日常が交錯するストーリー。

零 「かみのおとしもの」(前書き)

現実の世界と酷似しておりますが、実際の人物、団体とは関係ありません。

## 零 「かみのおとしもの」

それはとある日の会話。

「ねー昨日のテレビ見たあ？」

「あ、見た見た！ あれチョーヤバくない？」

「あ、ここらで最近なんか起きてるんでしょー？ 事件」

「そうそう、連続殺人事件だって！ やばいよねーっ！」

いつもの会話。いつもの時間。いつもの景色。人々のざわめき。人混みの熱気。それは当たり前すぎる日常が性懲りもなく繰り返されている証拠。少女たちは周りの喧騒に負けにくいくらい騒がしい声で他愛のない会話を紡ぎ、それは何の違和感をももたらすことなく喧騒の一部となつて溶け込んでいた。

「それよりさあ、昨日のマジカツコ良くなかった！？」

「あ、それ見たーっ！ マジカツコ良かったよ！ ヤバかったよね！」

「うんうん！ ホントカツコ良かった！」

「だよー。そういや、今日さ、『アレ』の日じゃね？」

「あつ、そーだ！ 忘れてた！ 教えてくれてありがとートモ！」  
「だるいよねー」

「なんか、実験台にされてるみたいじゃない？」

「モルモット、ってか？」

「そうそう」

「……『Drop』、か」

小さく吐息混じりの声で唇から紡ぎだされたその一言は、まるで水の雫が滴り落ちるかの如く地面へと落下していった。地面に落ちた水が夏の暑さと人々の熱気によってジュワツという音とともに消えるように、人々の合間を縫って落ちたそれは誰にも、近くにいた友達にすら届かぬまま、夏の暑さに溶けて消え、言葉の残滓はビル風によって空へとのぼり、消えた。

そしてそのあとにはいつも通りのざわざわとした喧騒が残されていただけだった。

\*  
\*

同日。

「やっぱさあ、俺は思うわけだよ。この一度しかない高校一年の夏、やっぱりさあ……こう掛け替えのない思い出！ みたいの作りたいじゃん？ みんなで海に行って恋のアバンチュールみたいなさ！」

こう、初体験は夏でした！ コングラッチュレーション！！ み

「たいなね、分かるだろう岸谷君」

「激しく同意」

「でさあ、こんなあつってくるしい教室で、将来何に役立つか分からない意味不明なモノを受けているより、海でバケーションしたほうが遥かに有意義じゃブゲラッ!?」

「!!! チョークが飛んできた……だと……!?」

「はい、そこ私語しない」

現在節電の名のもとにエアコンは二十八度設定、むさ苦しい男どもがぎゅぎゅうに詰まった教室内で、揃いもそろって大量の汗をかき、スポーツ飲料等を飲みながら不真面目な、いかにもやる気ありませんといった死んだ魚のような目で補習を受けている。ちなみに黒板には到底理解不能な数式やら図やらが細々と書いてあり、この暑さの中この内容を理解している者が一人でもいるか疑わしい。

「くっそ……アイツチョーク投げつけてきやがった……」

赤くなった鼻を押さえ、涙目で教師を睨むのは俺こと椿木蓮<sup>つばきれん</sup>。現在、俺は黒板に書いてある文字をヒエログリフを解読しているような気分です。ノートに写している。もちろん内容はサツパリだ。

「あれほどのチョーク投げは生まれて初めて見た……」

友人の怪我（かどうかは不明だが）をよそに教師のチョーク投げの技に感動しているのは俺の友人的<sup>きしたにきょうた</sup>な岸谷恭太である。ついでにこいつもいわずもがな補習組である。

「恭太！ お前はなんて友達甲斐のない奴なんだ！ 俺に彼女が出来た時後悔してのた打ち回っても知らないからな！」

「貴様に彼女など出来るわけがない。出来たら俺はアニメを見るのをやめる」

「くっ……き、貴様……」

「はいそこ廊下に立つとけ」

\*\*\*

ミンミンミンミンミン。

分かりやすく擬音で表現してみたが一步外に出たらセミが大合唱していた。セミの鳴き声が頭上の木からシャワーの如く降り注ぐ中、俺は汗をぬぐう。湿度の高い日本の夏のまとわりつくような、粘性のあるぬるま湯の中を泳いでいるような感覚に次から次へと汗が噴き出してくる。

「で、お前達は結局補習が終わるまでずっと立たされていた、と」

呆れたような雰囲気ですういのは、さっき俺達と合流した栞林檎しおりりんご。紫がかつた黒い艶のある髪を細めのツインテールに結んでいる。前髪は眉にかかる程度のぱつっん。中性的な口調だが、容姿や名前は女のものである。いや、生物学上は紛れもない女だ。栞は紫がかつた黒いツリ目の瞳でやや非難するような視線を投げて寄こした。ちなみにこいつは補習の参加者ではない。部活があつたらしい。

「うるせー。だいたいお前はいつも授業寝てる癖に成績いいとかありえねーんだよ」

「蓮に同意。なぜ、授業中いつも惰眠をむさぼっている栞の方が俺達より成績がいいとか理解不能」

「うるせー」

柔の小柄な体が動きたび、それに合わせてツインテールが不器用な双子の曲線を描く。せわしなく動くをれは不規則な振り子時計の軌道を連想させた。ゆらゆら、と動くそれは地面に影を落とす。いつも通りの会話を繰り返しながら俺達はいつも通りの道を歩く。夏の暑さにより、ゆらゆらと地面から立ちのぼった陽炎が景色を歪に歪ませた。

## 始 かこのとりと終わらない宿題

\*\*\*

ミンミンミンミンミン。

外では今日も忙しく蝉が騒いでいる。太陽はその手を緩めることなく一切の遠慮会釈なしに今日も地上をジリジリと焼いている。外に出た瞬間に融解しそうなぐらいの勢いの暑さだ。アスファルトの地面が放出する熱がさらに暑さに拍車をかけている。この暑さの中、元気なのは蝉くらいだ。

『今日の最高気温は三六度

』

つけっぱなしにしてあまり意識を向けていないテレビから切れ切れに聞こえてくる音声から推測するに、今は天気予報をやっているらしいとテレビの画面を見ることなく俺は思う。最近三十六度とか真夏日とか聞いてもあまりびっくりしなくなった。それが最早夏の風物詩なのだろうと。ぐつぐつと頭が茹り、思考がぐるぐるになる。駄目だ、完璧に暑さにやられている。その証拠にさっきからやっている数学の夏休みの宿題をやる手が止まっている。シャーペンが止まる。ついでに俺も思考停止。

「うわあああああああああああ！！」

なんだかわけのわからない気分になってぐちゃぐちゃになった思考を整理しようとして、でも茹った頭じゃ上手く整理できなくて、なんだかんだで大声で叫ぶという結論が導き出される。こんなことを

したら隣の部屋の妹が母親から「うるさい」等の苦情を貰うかも、と一瞬心配したが、とくに何の反応も貰わなかったのでほっと胸を撫で下ろす。その時、机に置いておいた携帯が振動し、何者からの着信を告げた。

「はいはい……」

そんな独り言を呟くと、電話に出る。電話の相手は恭太だった。携帯越しに聞こえるのはざわざわとした雑音。どうやら人の多い所にいるようである。

『ちよつと、コミケ回るの手伝え』  
開口一番これかよ。

「だが断る」

『ちよつと手伝え。報酬は出すぞ』

「報酬つてなんだよ」

『レア同人誌』

「切るぞー」

『あつちよつ、ま』

ブチッ。

恭太の慌てるような声が電話口から聞こえてきたが、気にせずに切る。今はコミケとか同人誌どころじゃない。

「で、これどうすればいいんだ……」

電話を切った後、俺はやりかけの数学の宿題、英語の宿題等々を呆

然とした目で眺める。この時期になるまでまったく手をつけてこなかった自分を殴りたい気分には駆られるが、いまはそれどこじゃない。とりあえずこの宿題をどうにかしないと話は進まない。俺は祈るような気分で、さっき電話がかかってきたばかりの携帯を手に取り、ある番号に電話をかける。

(頼む……出てくれ……！)

そしてほどなくその願いは叶えられた。

『……椿木？ なんだ』

(かかった……！)

電話越しから聞えてきたくぐもった声は紛れもなく栞林檎の声だ。こいつなら、こいつなら、今の俺を救ってくれと信じて……アレ……？

聞こえてくるのはバシャバシャと水が跳ねる音、遠くから聞えるキヤーツ！ とかいう喜び混じりの悲鳴、それから電話口近くから聞えてくるのは『ねえねえ彼氏？』『椿木君でしょ』『あつ、林檎いつも一緒にいるもんね！』『羨ましいっ！』『……クラスの女子の声だった。しかもやたらと騒がしい。』

『……悪いな。今、女友達と一緒にプールに遊びに行っているんだ』『そんなことはどうでもいいから俺を助けてください！ 神様仏様林檎様！ 俺の宿題を……っ！』

『宿題？ なにそれおいしいの？』

「……お前に電話をかけた俺がバカだった」  
『……そうか。じゃあ切るぞ』

「……燃え尽きたぜ……真っ白によ……」

俺は今の電話で全精力を使い果たし、文字通り真っ白になって部屋のベットに倒れこむ。もう宿題とかやる気にならない。しゆくだるい。あんなに意気込んでいた分、反動も結構なものだった。そのまま白い天井を眺めてぼーっとしていると口の端から「はは……はは……」という力ない笑いまで漏れてきて、俺はしばらくずっとそうしていた。

「……ってあいつら何俺を差し置いて夏を満喫してやがるんだよっ  
！！」

唐突に怒りが込み上げてきて、ベットに向かって枕を勢いよく投げつける。そのまままるでトビウオのようにじったんばったんベットの上で跳ねまわり、じたばたと足をばたつかせた。

「ちっくしょー！！」

カラン。

溶けかけた氷の浮いた麦茶のグラスが涼やかな音を立てた。

## 始 かこのとりと終わらない宿題式

\*\*\*

気が付いたら寝ていたらしい。目を開いて最初に飛び込んできたのは自室の天井と机に山積みされた宿題の山だった。その山はさながらヒマラヤ山脈のように俺の前に立ちふさがり、とんでもない威圧感を発していた。これからこの山を制覇しなければいけないという事に体が震える。……という茶番は置いておくとして。とりあえず宿題のエベレストを解体しつつ、必要なものを引っ張りだす作業の途中で俺は恐ろしい事に気付いた。手に持っていた数学の教科書が握力を失った手から滑り落ち、重力に従って床と衝突する

(ドラマ的演出)。

「英語の宿題の答えが……ない……だと……」

膝から先に力が入らなくなり、思わず床に膝をついてしまった。それはさながら強大な敵の前に屈した戦士のようで (ドラマ的演出二)。

「……取りに行くか」

あっさりと立ち上がり、ぼりぼりと後頭部をかきつつ俺はそう呟いた。この太陽が容赦なく照りつける中外に出るのは正直気が引けるが、取りに行かなければ、答えをうつ……答え合わせができなくな

つてしまう。それだけは避けたい。宿題を出さないとどーんと成績から引かれるのだ。あまり成績のよろしくない俺としてはなるべくそういうリスクは回避したいのだ。これ以上引かれると大変なことになりそうだし。

「何という俺いい子」

自画自賛しつつ立ち上がり、のたのたと制服に着替え通学カバンをもって玄関を出る。その瞬間照りつける太陽の日差しに俺は一瞬にして融けそうになった。氷のようにデレーッと融けて地面にだらしなく広がりそうだったのをすんでのところまで食い止めた。やばい、暑さで脳みそが融け始めている。俺はそんなことを思いつつ、いつも通りの通学路を歩く。

＊＊

学校に着く。別に省略してるわけじゃなくてただ単に特に学校行くまでの道に特筆すべきことがなかった以下略。夏休みの学校はどこもかしこも施設されていて、あいている所を見つけるまで暑い外をうろつろする羽目になった。ようやく開いているドアを見つけ、そこから学校内へと入る。いつもなら多くの生徒達でガヤガヤうるさい学内も人が少ないせいかわいらしいシーンと静かであり、窓の外から練習している運動部の声がわずかに漏れ聞こえてくるばかりだった。節電の煽りで照明が消え少し暗いリノリウムの廊下を歩く。階段を上がり、お目当ての一年C組の教室を目指す。

特に部活に使われている気配も感じない教室。俺は当然人はいないと思っていた。当たり前だ。部活に使われているわけでもないのに人がいるわけがない。部活に来ていたクラスメイトが俺と同じよう

に忘れものを取りに来たというのなら分かるが。俺は、なんとなくそつと　なんかそうしなきゃいけない気がして　教室のスライド式のドアを押して開ける。

おそらく無人の教室。何故かあいている窓。吹き込む夏の生ぬるい風。その端に見えたのは一般的銀色とも違うもつと色素の抜けた感じの……白。夏の空に鎮座する巨大な入道雲のような、白。

「……………はい？」

無人だと思ってた教室には先客がいた。

## かこのとりと終わらない宿題参

「え……………？」

俺はそれしか言えずに教室のドアのところまでまるで田んぼに刺さっているつかえない案山子のようにただ突っ立っていることしかできなかった。ちなみに俺が白い何かだと思っただのは砂糖菓子のような香りを振りまきながら空中を舞った長くて真っ直ぐな漂白されたような白い髪の毛だった。で、その髪の毛の持ち主は当然ここにいるわけ。これまた白い肌にはうっすら青い血管が透けてみえており、どこか儂げな少女の瞳はまるで零れ落ちる鮮血のように赤い。この特徴的な容姿。脳内で素早く検索をかけ、脳内データベースと合致したクラスメイトの女子の名前を呼ぶ。

「た……………小鳥遊……………っ、さん……………だっけ……………？」

呼びかけた声はしりすぼみになり、彼女の方に突き出しかけた手も中途半端に宙に浮いたままになり、気まずさを誤魔化すために俺は小さく笑う……………がどうにも顔が引きつっていような感覚がある。そして、ひらひらと波にもまれて揺れる海草のように小さく手を振る。そこで彼女は初めて俺の存在に気がついたらしく、ギ……………ギ……………ギ……………とでも音がしそうなぎこちない動作でじよじよにこちらを見る。何だろこの緊張感。俺は普通なら女子とでも気軽に話せるスキルを持っているが、ここの夏の教室で女子と二人つきりというシチュエーションは体験したことはない。ありえない。

「……………だれ……………？」

小首をかしげつつ小鳥遊さん（暫定）が儂げな声でそうつぶやく。

「……………」  
めのまえがまっくらになった。これは黙るしかあるまい。

（…………俺…………そんなに影、薄かったけ…………）

軽く泣きそうになる。下くちびるをきつく噛み、耐える。結構こう  
いうのはくるものがある。こう、腹に腹パン入れられたみたいな。  
こう、精神的にこう…………とにかく結構きついしくるものが…………。と  
にかく頑張って相手に問いかける。

「えっと…………樫木なんだけど…………知ってる、かな？ 一応俺お前と  
同じクラスなんだけど…………」

心はノックアウト寸前（言い過ぎ）のボクサー、足は生まれたての  
小鹿のようにガクガクしている。えーとなんでこんなになったんだ  
ろう。うん。

「樫木…………君…………？」

小鳥遊さん（暫定）が再び儂げな声でそう言い、小首をかしげる。  
まるでかわいらしい小鳥のような仕草だ。

「そう、樫木」

俺もつられて小首を傾げる。うん。分かっているこんなブサイクがや  
っても絵にならんことは。ただなんかつられただけなんだ断じて。

「わたし…………小鳥遊…………小鳥遊、ここ…………」

うん、知ってる。喉元までその言葉を飲み込み、俺も相手に倣って  
とりあえず自己紹介をする。入学してからもうしばらくたっている  
のに自己紹介とは不思議な感覚だ。

「俺、樫木蓮。よ、よろしく…………？」

何故か言葉の末尾が疑問形になったか不明だが、おれは再び小鳥遊

さん（確定）の目の前に自らの手を差し出す。小鳥遊さん（確定）はその手を何かの研究のサンプルかなにかを観察するような精緻で無機質な視線をもって眺め、それからそろそろと自分の手を緩慢な動作で差し出すとふわっと俺の手を握った。正しくは「触れた」の方が正しいかもしれない。感覚的にはそれぐらいであった。

「……よろしく」

それが俺と小鳥遊の第一次接近遭遇だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1332w/>

---

Drop Out !

2011年10月9日15時00分発行